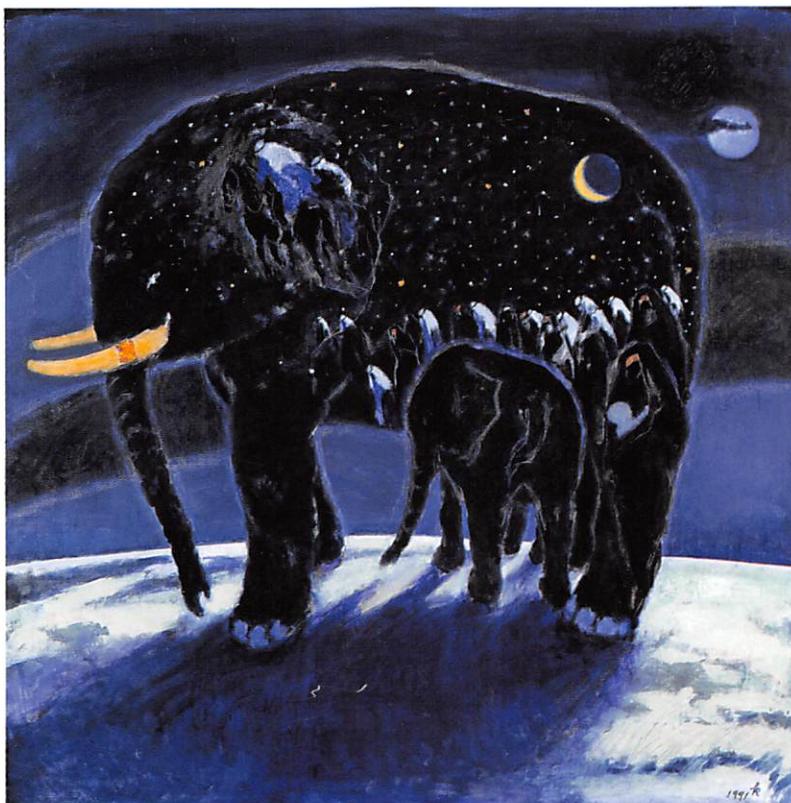


会報

第26号

平成7年2月

社団
法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



1991年 油彩・キャンバス 162.0×162.0cm

新収蔵作品 国松 登「星月夜」

国松登は1907年函館生まれ。昨年東京滞在中に急逝し、突然訪れたその死が多くの人々に惜しまれた。戦前から独立展や国画会に出品し、終戦直後は全道展の創立に参加するなど、一貫して北海道の美術界のまとめ役をかけてでながら、独特の幻想性溢れる

世界を描き続けた。本作品は91年春に開催された国画会の出品作。4点描かれた「象」シリーズの最初の作品である。制作中に湾岸戦争が勃発。「南方の象は星月夜となり、私は悲しい民衆の避難する情況を表現したのです」と作者は語っている。

美への懸け橋

— 美術館協力会に思う —

神野善司

(京王プラザホテル札幌社長)



抽象画や、作家の感性でモディファイされた絵は別として、花や人物は本物に限る、と私は思っていました。しかし、よく画かれた絵には、花にその榮枯を感じ、人物にその盛衰をみることができるようになりました。40才代になってからのことでしょうか。多くの絵に接するようになってからです。

絵画ばかりではありません。時代を経た陶磁は、平凡な作でも、その磁肌に美しさを感じます。窯から出て間もない陶器でも、作家の心が入った成形や絵付けには、感動を覚えます。

絵でも焼き物でも、技術が優れているだけではなく、素直に感動する心を持ち続けながら創出したと思われる作品には、心が動かされます。「買ってくれ!」、「評価を落としたくない!」等の邪心のない美しさがあります。

動きの一瞬を捉えた写真も、一気に走った墨跡も、また流れる瞬間を止めたガラス工芸品も、良いものには、作家の心にラップして、時と空間の拡張を感じます。

美術館には、それらの作品があります。

「美しいものを、美しいと感じる。その心が美しい」は、相田みつおさんの言葉ですが、邪心のない作品が感動を呼び起こすと同じように、観る者も、理屈でなく、素直な心であって初めて、美しさの感動が得られます。

美術館は、その心の懸け橋となる所であります。そして、それを支える事業体も、ボランティアの協力会も、その素直な、美に対する感動があって、人々と美術を繋ぐ懸け橋となることができます。美術は、神秘的・宗教的直感で私たちを永遠と宇宙に媒介してくれます。美への献身とは、このようなものだと思います。

私は、最近「色」に関心を深めています。ゴッホの「黒も白も色である」というとおり、黒も白も含めて、色に興味をもっています。

世界190か国の国旗の色は、赤・青・黄・緑・黒それに白が基本で、五輪旗の色と同じです。そのうち75%の国が、赤を使っています。その赤を、太陽や花のイメージとしている国は、日本やモナコなど極く少数で、大部

分の国は、戦い・流血と団結のイメージであります。

赤には優しさ・美しさと、戦い・血の両面があります。

青は世界の半数で使われています。空の青、海の青で、希望・理想・平和のイメージであり、国連旗の色でもあります。しかし、ブルースが黒人哀歌であるように、陰のネガティブな色でもあります。すべての色は、二面性を持っています。黄色も、緑色も、黒も白もそうです。

日本の、白地に日の丸は素晴らしい旗で、抽象美術の最たるものであると思いますが、世界の大國は、白地に赤と青の組み合わせが多いです。英・米・仏、それに帝政時代に戻ったロシアの三色旗。赤青白に国家存立の歴史と団結と繁栄、そして平和を託しています。

歴史上の多くの美術家が、聖母マリアを画いています。キリスト生誕前のマリアは白衣ですが、イエスを抱くマリアは、血の通う、優しい人間としての赤い衣装に、人間を超えた存在の、神を啓示する青いマントを着けています。色が、人間と神の世界の懸け橋となっています。

先日、札幌市内の某百貨店で、世界の児童絵本の展覧会がありました。本の内容や絵柄は国ごとに違いますが、色については共通のものがありました。大人の本になると、どのジャンルの本でも、それぞれのお国がらが色合いで出ていますが、子供の世界では共通です。

美術は、世界に共通の共感を与えるが、色合いや、色の組み合わせに対する感情は、必ずしもインターナショナルとはいません。国情・宗教・民族・歴史に培かわれた、ナショナルなものだと思います。

そして色そのものは、児童絵本にみられるように、ナショナルな概念に染まっていない、世界共通のものでありながら、色に対する感じ方は、極めて個別的な、パーソナルなものであることを知りました。

美術を示向する、10人10色の人々に対して、1人10色の感性で、お手伝いするのが、協力会の仕事であると思います。

.....美術館ニュース

北海道立近代美術館

平成7年度の道立近代美術館の展覧会を紹介します。今年1月に故国松登氏の遺作を当館に寄贈いただきましたが、新年度の「これくしょん・ぎゃらりい」は、この国松登氏の寄贈作品をまとめて公開する「氷人逝く—国松登の世界」からスタートします。次いで「はずむ色・おどるかたち—美術にみるリズム」展、「親密（アンティーク）な風景—家族・恋人・友人たち」展、「北のトボス—四人の原風景」展、「現代日本画の魅力」展など、当館のエコール・ド・パリや、ガラス、そして北海道の美術などのコレクションを駆使した多彩な切り口の展覧会を開催します。

特別展は、道東に生まれ、その厳しい自然とそこに生きる人々の姿を飽くことなく描いた居串佳一の回顧展「オホーツク・魂の還流—居串佳一展」が新年度最初の展覧会として開かれます（4月14日～5月14日）。北方的な詩情をたたえたその表現世界を、油彩、水彩、素描約100点によって紹介します。次いで開かれる「クロッシング・スピリット—カナダ現代美術展1980-94」（5月24日～7月5日）は、日本で初めて本格的に紹介されるカナダの現代美術展です。多民族国家カナダにおいて、今日的な文化状況をテーマとし、写真やビデオを駆使した9人のカナダを代表する作家の作品を紹介します。

夏には「モネ『睡蓮』と今日」展（7月14日～8月20日）が開かれます。印象派を代表するモネの「睡蓮」はわたしたちにも大変なじみ深いのですが、この連作は現代の絵画にも大きな影響を与えており、とくにフランスの現代画家ルイ・カースは「睡蓮」を源泉に優れた創造を果たしています。モネとルイ・カースの作品約60点によって、モネの睡蓮の現代的意義を探ります。次いで開かれる「横山大観—海、山、空の世界」展（8月26日～10月1日）は、近代日本画の巨匠、横山大観の画業の中から、自然を主題とする名作を精選し、雄大無比な大観芸術の精髓を紹介します。

秋から冬にかけては、優れた刺繡の伝統を持つ韓国の工芸の一端を紹介する「希いをぬう・喜びをつなぐ—李王朝時代の刺繡と布」展（10月7日～11月26日）、恒例の「A★MUSE★LAND'96」（12月16日～1月28日）、シャガールの愛の世界を版画を中心に紹介する「シャガール—愛のかたち」（2月2日～3月17日）を開催します。

北海道立旭川美術館

旭川美術館では平成7年度も東西の美術を幅広く紹介する企画展、特別展を開催致します。それらの事業を簡単に紹介していきましょう。

「浮世絵の子どもたち」展（4／15～5／14）では江戸から明治時代にかけての浮世絵の題材の中から特に子どもに関連する文化・風俗に焦点を当てた斬新な内容の展覧会です。春信、歌麿、清長、北斎、広重らの親しみやすい作品約200点が紹介されます。

「名作でつづるフランス絵画 トゥール美術館展」（5／20～6／18）では、古城の町として知られるフランスのトゥール市の美術館の所蔵品からブランシャール、ブーシュ、モネなど17～19世紀のパロック、ロココから印象派にいたる絵画の名作をご紹介します。

「朝倉力男展」（6／24～7／30）は、道展会員で、旭川に長く在住した朝倉力男（1903～1989）の画業の全貌を紹介します。彼は雪景色を得意とし、北国の風景を厳しい制作態度で描き続け、「雪の朝倉」として知られました。

「20世紀絵画への眼差し—マーグ・コレクション展」（8／5～9／10）は、南フランスのマーグ財団美術館の近現代美術館のコレクションを国内で初めてまとめて紹介するもので、シャガール、ミロ、レジェ、カンディンスキー、カルダーなどの巨匠から現代作家の作品まで幅広く近現代美術の動向と魅力をご紹介します。

「田中一村展」（9／15～10／15）は、画壇との交渉を絶ち、亡くなるまでの20年間奄美大島に住み、孤独の中で制作を続けた日本画家田中一村（1908～1977）の色彩豊かで個性的な花鳥画、写生画の世界の魅力をご紹介します。

このほか、道北地方ゆかりの3人の夭折の画家たちを紹介する企画（11／3～12～17）、木の現代造型の多彩な展開を当館の所蔵品を中心に紹介する企画（1／5～2／18）、北海道立近代美術館からの「アミューズランド」の巡回（2／24～3／24）など、多彩な展覧会を予定しています。ぜひご来館ください。



喜多川歌麿
「夢にうなされる子供と母」

美術館ニュース

北海道立函館美術館

平成7年度上半期に当館で予定している特別展を紹介します。

まず初めは、4月8日から5月14日まで開催される『ルオーブ版画展』です。道化師や娼婦、貧しい人々、キリストの受難などを好んでモチーフにしたことで知られるルオーは、社会や人間の心理を鋭く観察し、人生の悲惨な一面や、現実の醜悪さをその作品のうちに浮彫りにしています。本格的な版画制作をはじめるのは1906年に画商ヴォラールと出会ってからですが、さまざまな技法をこらした重厚で個性的な版画作品は、ルオー芸術の中でも重要な位置を占めています。本展では『ミセレーレ』、『受難』などの代表的なシリーズを中心として紹介し、ルオーブ版画の全貌に迫る内容になっています。つづく5月20～6月26日は、当館がそのコレクションと連動して毎年開催している書の展覧会が行われます。今回は誰からも親しまれる書を目指す近代詩文書の大作が一堂に会します。さらに、7月1日から8月20日は、『女流印象派3人展』を開催し、近年見直されつつある19世紀後半の女性作家の活躍を紹介します。印象派の展覧会はこれまでにも国内で数多く開催されてきましたが、その中にあって、メアリー・カサット、ベルト・モリゾ、エヴァ・ゴンザレスの女流三者は取り上げられる機会が極めて少なかったといえます。今回はフランス側の全面的な協力を得て、代表作を中心に大々的に紹介し、その女性ならではの優しさと光に満ちた画面をじっくりお楽しみいただきます。8月26日から10月1日までは、ベルナール・ビュッフェの大回顧展が開催されます。無彩色を基調とした禁欲的な画面の中に、とげとげしく痩せた人物や静物を配して戦後の不安を見事に表現してみせたビュッフェは、現代具象画における唯一の巨匠として君臨しています。今回の展覧会は、40年代の初期から近作まで約80点の油彩作品を通じて、その芸術の精髄をご覧いただける貴重な機会となっています。



ジョルジュ・ルオー「黒いピエロ」1935年

以上、特別展を紹介してきましたが、ミュージアム・コレクションをはじめ、講演会、特別展セミナー、美術映画会、ミュージアム・シアター、コンサートなど、今期も多彩な活動を用意しております。

北海道立帯広美術館

* 特別・企画展（主展示室）

4月15日から5月14日までは、『歌川国貞展』を開催します。歌川国貞は、江戸末期を代表する浮世絵師のひとりです。本展では、これまでまとまって公開されたことのなかった国貞の『淨瑠璃づくし』(10点組)を中心にして計11点の作品により国貞芸術の精華を紹介します。

5月20日から6月18日までは、『居串佳一展』を行います。居串佳一は明治44年現在の北見市に生まれ、昭和33年に44歳の短い生涯を閉じるまで、主として北海道をテーマとし、オホツク海や道東の自然とともに生きる人々やユーカラなど北方ならではの幻想世界を飽くことなく描き続けました。本展は、約100点の作品により道東の代表的作家・居串佳一の画業を回顧します。

6月24日から7月30日までは、『20世紀への眼差しマーグ・コレクション展』を開催します。1906年に生まれたエメ・マーグとその妻マグリットは、同時代の作家たちと親交を結び、彼らの作品を収集しました。そして、1945年にパリにマーグ画廊を、1964年には南フランスにマーグ財団美術館を設立しました。ミロ、レジェ、シャガール、さらに黒田アキ、ガジオロフスキイなど、わが国で初めてまとめた形で公開されるマーグ家のすぐれたコレクションをお楽しみください。

8月5日から9月3日までは、『アンドレ・フランソワ展』を開催します。1915年ハンガリー（現ルーマニア領）に生まれたフランソワはホスター作家の巨匠カッサンドルに学び、これまで絵本の原画、舞台デザイン、絵画、彫刻と幅広い作品を制作、国際的に活躍してきました。本展は、フランソワの近年の代表作により、彼の表現世界を紹介します。

* コレクション・ギャラリー

4月15日から7月30日までは、戦後日本の代表的なポスター作品約30点を紹介する『現代日本のポスター展』を行います。

8月15日からは、帯広在住の現代作家・中谷有逸の代表的な作品を紹介する『中谷有逸展』を開催します。この展覧会には、7月に実施予定の作家と市民による共同制作『アート・ウォッチング95』で制作した作品もあわせて展示します。



淨瑠璃づくし おふさ徳兵衛
心中重井筒

.....美術館ニュース

北海道立三岸好太郎美術館

三岸好太郎美術館では、三岸の画業の展開をさまざまな側面からたどる所蔵品展を、約2か月ごとに展示替を行なながら、各期にテーマを設けて開催しています。平成7年度もいろいろなテーマでの所蔵品展の開催を予定し、多様な角度から三岸の芸術をご覧いただきたいと思います。美術館に足をはこぶたびに、また新しい発見をされることもあるのではないかでしょうか。

さて、今年の特別展を紹介します。

「個性の時代－草土社から春陽会へ 岸田劉生・木村荘八・中川一政と三岸好太郎（仮称）」（5月30日～7月16日）では、初期の三岸が画家としての地歩を固めていくことになる春陽会において、彼に大きな影響を与えた三人の画家－岸田劉生・木村荘八・中川一政の作品や資料などを通して、三岸と彼らとの関わりや三岸の画風の形成におけるひとつの底流を探ります。

大正から昭和初期にかけては、開放的な雰囲気のなかに個性際立つ活動が活発に行われた時期です。大正4年に成立した草土社や、大正11年結成の春陽会にみられる独創的な制作の展開も、その重要な側面といえるでしょう。そして三岸好太郎も、大正後期、草土社の画家たちの作風からの強い感化をうけて画業をスタートさせ、やがて春陽会での入選、受賞を経て新進画家として脚光をあびるようになります。とりわけ草土社から春陽会に参加した岸田、木村、中川らに三岸は指導や助言を仰いでおり、彼らもまた三岸の素質を評価していました。こうした状況のなかで、三岸がいかに学び、どのように自己の個性を表出して画境を拓いていったかをさぐっていきたいと思っています。

秋の特別展は、三岸の女性表現の特質をさぐる「魅惑の婦人像（仮称）」（10月14日～12月3日）を予定しています。かれんな少女から妖艶さを漂わすような女性の面

影まで、婦人像の表現は三岸が生涯にわたって主題としたもののひとつです。それらはモデルの肖像をこえ、三岸が陶酔した女性美のイメージをあらわして、豊かな魅惑をたたえています。所蔵品展とあわせて、三岸の多彩な魅力と情熱をご覧いただければと思います。



三岸好太郎「童女花持てる図」
1923年

財団法人札幌彫刻美術館



本郷新「花束」
(札幌市真駒内五輪大橋)

は、1993年1月から'94年12月までに日本全国の公共空間に野外彫刻として制作設置された作品の中から1点を選考し、賞金100万円を贈呈するとともに受賞作家による作品展を開催します。選考方法は、あらかじめ当館で委嘱した推薦委員の推薦作品の中から選考委員による厳正な審査を行い受賞作品を決定します。贈呈式及びシンポジウムは8月3日(木)、受賞記念展の会期は8月4日(金)～10月1日(日)を予定しています。

野外彫刻が、様々なシンポジウムやコンクールを通して、あるいは景観の充実のため町並みに置かれる機会が近年益々多くなった現在において、「本郷新賞」は全国的にも注目されるようになりました。

収蔵品展としては、特別展をはさんで前期と後期に分け、テーマを設定し彫刻、絵画等を中心展示、本郷新的彫刻家としての軌跡と魅力を紹介します。

そのほか、「札幌市内彫刻めぐり」を札幌市内に何げなく点在している野外彫刻の理解を深めていただくために開館以来実施します。また、北海道内の美術館めぐり等も行う予定です。



第6回 本郷新賞受賞作品 渡辺 行夫「風待ち」
(洞爺湖浮見堂公園)

美術館ニュース・

芸術の森美術館

目の発見・目の思考—絵画にせまる

(平成6年12月24日-平成7年4月19日)

この展覧会は一枚の絵と素朴な出会いの場をつくりだそうと、当館で所蔵する絵画作品によって試みようとするものです。作品に使われている油絵の具や岩絵の具、あるいはキャンヴァスといった素材やその技法を知ること、またはその作品と似た傾向の他の画家の作品とを比較することなどを通じて絵画をみていきます。

たとえばいつもの距離よりもぐっと近づいて画面を見ると、絵の具の塗り方や線の引き方などが見えてきます。筆の毛先一本一本の筆跡を発見したり、ナイフで塗られた光沢のある色面に気づきます。また下になっている絵の具の固まりの上に半透明の絵の具層が施されている箇所には、豊かで深みをもった画面がつくりだされているのが分かります。そうしたことに気づいたときに体験する臨場感は、たとえ見慣れた絵に対してでも一つの新鮮な驚きを与えてくれるもののです。



八木保次



八木保次「青絵」1978年頃

また、芸術家は遠い過去の作品やすぐ近く、または同時代の他の芸術家の作品などから刺激を受けて、自分の制作の糧にすることがしばしばあります。あるいは直接の影響関係ではなくとも、その時代がつくる社会には大なり小なり芸術家は関わりをもって生活し制作しているはずです。また表現しようとすることや感情が人間に共通するものは、現在、過去、洋の東西に関わらず同じように作品に現れていることがあります。そうしたことから同時代、あるいは過去のものを比較しながら見ることで、画家が表現しようすることが分かりやすくなることがあります。



このように、画家の気持ちや表現したいことを身近な参考資料との比較で考えてみたり、画面に隠された秘密を注意深く探っていくと、絵の組み立てや技法、画面の上での画家の思考の跡を見つけることができます。さて、どこまで絵そのものの成り立ちに迫れるか、自身の目で手がかりを見出し、考えてみませんか。

新入会員の紹介（平成6年7月～12月）

ご入会 ありがとうございました。

会員の動き

美術研修旅行記

第3回北海道美術館めぐりの旅

印象記

横 関 静 枝



雨の朝の出発でした。ガラス越しの霞んだ景色と日程表を見比べ乍ら1泊2日の旅に思いを馳せて旭川へ向いました。

道内美術館めぐりは

3回目との事ですが私には初参加でありとても楽しみにして居りました。

車中同行して下さった学芸員（鈴木正實氏）の方が近代美術の経緯をユーモアを混じえ乍ら解り易く説明して下さり私の期待は更にふくらみました。

旭川市内のホテルで昼食後漸く道立旭川美術館に到着ここでも同館学芸員より特別展「20世紀美術の巨匠たち」の鑑賞のポイントをスライドを使用して説明があり、やはり一味違った感じで視ることが出来たと思って居ります。中でも今まで図録でしか見る事の出来なかった大好きな画家、ニコラ・ド・スターの作品に出逢えた事がとても幸せでした。

翌21日は期待通り晴れ、層雲峡の深い緑の中を出発、彫刻美術館・井上靖記念館へ伺いました。両館とも公園に隣接し特に彫刻館の方は重要文化財指定の旧陸軍の将校さんの社交場として建てられ天皇行幸の際の御宿泊などにも使用されたとの事で建物そのものが優雅であり、その中に中原悌二郎の作品を中心に四十点余りの彫刻がひっそりと品良く展示されて居り何か清々しさを感じま

した。井上靖記念館の方も良くこれだけの資料や身のまわりのものを集めたものと、来館者の興味を充分満足させ得るものでした。

次に「ラ・ギルランダ美術館」へ。バスガイドさんの美瑛の景観の流暢な説明を聞き乍ら深山峠に建つトリックアートの世界に着きました。ほどほどの前評判も耳にしていましたし、本当に楽しみにしていたのです。しかし好みや感じ方に個人差があるとしても私には全くつまらないものでした。その技巧と労力はうなづけますが、世界の名画や彫刻（ほとんど古典的なもの）を模したトリックなるものがバリエーションに乏しく、エッシャー やダリの世界を求めるのは無理としても、もう少し作者のオリジナリティーがほしかったと思いました。

ともあれ以上で美術館めぐりは終り、富良野でワイン付きランチをいただき、帰路に着きました。

2日間、作品との出逢、ひととの出逢いに深い感慨をおぼえ、良い旅であったと思って居ります。



会員の動き ······

美術研修旅行記

南仏の花

江澤キクエ

此の度、皆様のお仲間に入れて頂き南仏からパリの旅に行きました。旅行記は各分野の達人の方々ですので、感性豊かな名文を読ませて頂けるので、私なりの細やかな寸感を綴ってみます。

5月末にオランダに行った時、公園や街並、家の窓に予期以上に美しく華麗な花々に驚嘆しました。

泊まったホテルのロビーにカラシコリエの花が色とりどりに咲いていました。小枝を持ち帰ったのが最近黄色い花をつけ始めました。南仏の街々やホテルのロビー、公園とこの花が沢山見られました。

私達が夜ニースに到着した次の日から空港が47年ぶり初めて閉鎖になる程の水浸になりました。すぐ後に着いた日本人グループの方は急速マルセユ空港に着き、予定宿泊地ニースにバスで夜中の12時頃着いたそうです。私たちはタッチの差で幸せしました。翌朝雨も晴れて海岸通りを散歩しました。通りは一流のホテルが威容に建ち並び、車の多い舗道を経て、歩道には鉢植えだけ見ていたシクラメンが露地植えで、色とりどりに咲き、紫の小花黄色橙色紅色、カンナ等と温暖な地らしく花盛りで建物も花も一層映っていました。

昨日の荒波のうねりは嘘の様で、紺壁の空、海、清澄な空気を深く吸って昨日の泥色をしていた海が青く澄み湾曲に煉瓦を敷き詰めた世界一の保養地の晩秋の散策は人気が少なく素晴らしいものでした。

散歩道に沿って三重位に植えられた花々を市の職員が50センチ位の長さの火鉄ようの先で潤んだ部分を摘み取っていました。

暴風雨跡の海岸で幾人もが長い棹ようの先で何か引掛っているのを見て不審がっていましたら地中海は昔から沈んだ数多くの船、又は夏中に賑わった人々のおとしものが波で打ち上げるのを収集しているとの事でした。指輪とか色々あるそうです。

シャガールが晩年暮らした山荘とお墓を見学しました

が、小高い突き出た丘全体が何十ものお墓で縦長の廻りに美しい花々を植えたり鉢で一面に飾られている綺麗さには吃驚りました。11月は日本流ではお盆月の8月だそうでお詣りの人々で賑わうそうです。黄、赤、橙、白色と新鮮な菊、シクラメン等多数の花々で壯觀でした。眠れる方々も微笑している事でしょう。菊の種類が多く街々にも鉢物が沢山で花市も賑わって驚きました。

エクス・アン・プロヴァンス方面の丘や野には一月末頃、見渡す限りミモザが咲くそうです。黄色に色彩られた平原や丘は陽を浴びたら輝く様に美しい事だろうとその頃に訪れてみたいものです。

バスの沿道にオリーブの木、アーモンドの木が沢山見られましたが山櫻風の花がたわわに咲くアーモンドの満開も見事でしょう。晩秋の街路樹は百年以上のマロニエの木々の葉が黄、橙色に輝き黒褐色の鈴型の実をつけたり、舗道には湿った厚く大きい落葉が重った上をコツコツ歩むのはこの時期の詩情と感激し、シャンソンの枯葉を想出しました。帰社して札幌のマロニエの侘しい色合とは余りに異なっていました。

食事にご飯入りサラダや料理のつけ合わせにご飯が出ましたが、この他にジャボニカ米やインデカ米を作付しているそうです。刈り取の跡と干してあるのを見ました。

香袋がこの地のお土産として売られていましたが、春は童が一面に咲き、夏はラベンダーその他の花々が広い広い平原を一面に彩色する事でしょう。淡ピンク色の山茶花も盛りでした。

美術館めぐりの感激は予想以上でしたが、自然の平原の花々や、ブドー畠等も心に触れる多大な収穫の楽しい旅でした。



美術研修旅行記

“美の探訪”断片

棟 幸子



私たちのC班は33名。この班は申込者が予定を大きく上回り、A班とB班との間に急きょ作られた班で、11月11日出発、22日帰国の日程でした。ですが、この班が一番僕せだったのではないかと思っております。それは旅の醍醐味は添乗員の采配の芸術性(?)にあると訊いていたからです。添乗員の畠中さん、暖かな心配りをされた浦田団長御夫妻に感謝を申し上げます。そして学芸員の長瀬さん御苦労さまでございました。11月12日のニースは久しぶりの青空のこと。と申しますのは、その数日前に大規模な水害があり、空港も閉鎖になるほどで、水害の後片付けがどうやら済んだ頃に第一步を踏むことができたのです。山あり海ありの避寒地で、どこからの眺めも素晴らしい、宿泊したホテルの前は「イギリス人の遊歩道」と呼ばれ、片側4車線を含む幅広い道路が続いていました。早朝からジョギングする人たち、漂うような歩みの恋人たち、仲睦まじい老夫婦、歩みを留めては海を見る人たち、スカイブルーの海を泳ぐ若者たち。まるで映画のシーンのようで、時間がここではゆっくり流れているのでした。気が付いたのは老人が多いということ。人口40万人に対して12万人の高齢者なのだそうで、ですから若者の仕事が見つけにくいニースでもあるようです。

最初に見たのはシャガール美術館。入口にミモザの木や花壇のある落ち着いた前庭の奥に、象牙色の清楚な建物が見えました。学芸員長瀬さんが先ず神の二面性を表している「アブラハムと三人の天使」という作品を説明してきます。作品を鑑賞しながら、私はあらためてひとりの画家の生涯というものについて考えさせられました。私はこれまで、シャガールをそれほど好きではありませんでした。それは今まで分散的にしかシャガールを見ることができなかった為のようです。聖書の新約の中に旧約を取り入れて描くという、シャガールの魂の流れ

に接して、シャガールに内在したものの大いなる精神世界に触れたように思いました。それは後で見たパリ国立近代美術館の彼の亡命前(ナチによる迫害)の作品に接していっそう強く感じられたことで、晩年を過した山荘や夫人と共に眠る墓地も訪ねることができ、今も彷彿と胸に湧いてくるのです。

マチス美術館は改装オープンして2日目とかで、当初の予定になかったようですが、C班として見ることができたのは恵まれたことでした。マチスらしい色の美術館で、標識は小さく簡素。見落しそうになりますが、見落しがたく存在して有りました。私は此処で、ニースを描いたマチスらしくない青い海の絵に出会いましたことも、忘れないと思っています。青の切り紙絵も素晴らしい。

セザンヌの晩年のアトリエも訪ねましたが、周囲が小さい森で、その中に幾本もの小径があり、それだけで浪漫性いっぱいです。アトリエに書棚もあったことなどはつとしました。

ボルドーからトゥールまでフランスの誇るTGVに乗ったことは、美術館や古城めぐりなどの美的文化と調和した技術の文化を味わうことができ、心に残るものひとつでした。いくつかのカテドラルの息を呑む思いのステンドグラスの冴え。先生方に引率された可愛い子供たちの美術館での勉強振りはなんとも羨ましい。そして最終日のオランジュリー美術館での圧巻、白内障のモネが描いた「睡蓮」の大作の壯観な美の深遠さなどは、言葉に尽くせないものでした。書きたいこといっぱいですが予定紙数が尽きたようです。



会員の動き.....

美術研修旅行記

シャガールの足跡を訪ねて

藤 松 陽 子



「美の探訪」A班に私共夫婦で参加、11月4日に出発し12日間のフランス旅行を楽しむことが出来た。ニースからパリ迄の10日間に10館の美術館見学、セザンヌのアトリエ、教会や大聖堂、中世城壁の街カルカソンヌ、ロワール地方の中世古城巡り、パリ市内見学、そして夜のセーヌクルージングと、日々が瞬く間に過ぎ去った。この思い出をささやかな一美術愛好家として目と心に残る印象を、思いつくままに書き留めてみようと思う。

着いた夜は雨のニース。翌朝ホテルの窓のカーテンを開けると目の前に広がった海と棕櫚の並木道。そうだ、ここはコート・ダ・ジュールだったのだ！A班のコーディネーターとして同行された渡会先生が「まさにデュフィの世界」と表現された言葉に、その通りと心で肯く。

初日はニースの花市場から始まる。皆、花より果物を買っていて私も葡萄を買って楽しむ。この日一日雨が降り続き、これがニースでは有史以来の洪水となったそうで、空港も閉鎖されたとか。快晴になった翌日世にも不思議、紺碧の海の一部が線を引いた様に白いコート・ダ・ジュールが現れた。泥水の被害は街の中にもあちこち見受けられ、それを報じた地元の新聞を記念にもちかえつたけれど、バスの運転手ジルさんも大変だったと思う。

シャガール国立聖書美術館は、少し前に読んだシャルル・ソルリエ著「わが師シャガール」でこの美術館の出来た過程を思い、現実にこの目で見る事が出来て感激する。数々の大作は美しい色がぱッと目に飛び込む。それにあの魚や鳥の切れ長の大きい目。あの目は人間世界の何を見つめているのだろうか？ユダヤ人として生れ数々の辛苦を乗り越えながら、大家になんでもどこかおどおど人見知りをした画家。人の愛を信じて、98才の天寿を全うする迄全力を出し切った人生の達人。その一世紀にも及ぶ生涯を終えて今は静かな眠りについているサン・

ポール・ド・ヴァンヌのお墓。雨で洗われた墓碑や花々、囲りの樹木に穏やかな秋の陽が降り注ぐ。帰り道もう一度振返って眺めた丘の上のサン・ポールの街は、遠くこんなもりと夕陽を浴びて輝いていた。

前日はモナコで王家の教会を訪れた。花々で飾られたグレース王妃の墓碑の前に佇み、華やかな在りし日と、波瀾にとんだ生涯とを思い偲ぶ。私がこの世を去る迄に如何程の事が出来ようか……。

セザンヌのアトリエは晩秋の空気の中にしつつ溶け込み、雨で落ちた枯葉にも風情が漂う。部屋に置かれたパレット、絵具のこびりついた踏台、天井近く迄高い脚立、ショルダーバッグ、石膏のクピト像、次の間の蔵書類、90年前の或る時間が突然眼前に迫り何かにゆさぶられて涙が込み上げて来る。窓の外に目を留めると庭の木々が揺れている。セザンヌが描き続けたサント・ヴィクトール山。淡青い山の絵を見て想像していたのは優しい山のイメージだったけれど、別の角度から見た山は、石灰岩の厳つい姿でどんと長く横たわっていた。

他にもマチス、ピカソ、ロートレック等洗練された巨匠達の個々の美術館も堪能出来、風景や空気も思い出されて、今もこの素晴らしかった旅の余韻を味わっている。最後に初参加の私達をお世話下さった団長の鈴木様、副団長の岡嶋様、班長の飯田様、御専門の立場から美術に関する様々な話をお聞かせ下さった渡会先生、A班全員の方々、東急観光の芝生様、有り難うございました。



シャガールが永眠する墓地のあるサン・ポール・ドヴァンヌ

ESSAY

写真を撮る時に心がけていることは、「美しく撮ること」。写真是「真を出す」と書くが、けしてそうとは思わない。光の芸術といわれるようすは、光の当て方やその人の動きや表情を上手にとらえることで、いっそう美しく表現することができる。映画監督の山田洋次さんが対談で訪れた。

三浦綾子さんの最初の言葉は、「私は恋人の遺骨を持ってお嫁に来た人間なんですよ」だった。棚に安置されていたあと、山田さんは、すり切れた畳に手を触れながら、「この畳は勲章です。けして替えないでください」と頭を垂れた。印象的な光景だった。

そしてレンブラントの有名な、「ニコラス博士により腕の解剖」「一六三二年」に出逢った。ドクトルニコラスを囲んで講義を開く人々の真剣な表情、それぞれの個性、その時の霧雨気をそのままに伝えている大作を目の前にして言い知れぬ感動に佇ちつくしたのであった。その後は予定していた、オルセー、ルーブル、イタリーではアッシジまで訪れた。こういう時代であったので感動も入りであったと思う。

元旦の夜は日本店の居酒屋で日本酒で乾杯、おぞうにでお祝い・その時の会話の中で、外国にて孤独感・緊張感、不安感があるから人とつながりを大切にしたいという。一人になつた時のつらさがわかるので、優しさを身につけることが出来るという。その上で興味を持つ、見る聞く、知る、何にもつながる話だ。音楽も絵もハーモニーだとと思うが、好奇心を失わず、新鮮で感動する心を持つことを自分自身に語り励ましてやる。そして理解してくれるファンリーと沢山の友人に感謝したい。絵という「宝物」を何時までも大切に人生の旅をつづけようと思つてい

旅行先では急ぎ足なので、その訓練に未だ二ヶ月あるので野幌の原始林に出掛けました。

秋の紅葉の中を例年のようにキノコ採りをしながら体力もつけようとしたのですが、そのキノコが仇になりました。思わず入院生活です。

十日程絶食点滴で各種の検査は全く意外で病名もなく漸く軟食になってしまっても腹空状態が続き月末に退院しても旅行のキャンセルを考える有様でした。

予定は未定で決定ではない、度々変更する事もある。

戰地での上官の言葉を想ふ。

協力会費を拂いに行つたその場に
美の探訪のパンフレットを目にした
ので急いで参加を申込もうと電話に
手を出したら直接でないと駄目です
よ、と云われて急いで美術館を出る。
丁度よくバスが来たので乗り込み交
通公社へゆく。早速申込しようとし
たら東急に変更になっている事を知
りその東急で参加申込を済ます。順
番をきいたらラスト前との事危うく
不参加になる処でした。

カメラの目



後山 一朗

昭和三十六年三月、夫がアメリカへ行く事になった。六ヶ月ともなれば私も行かなくてはならない。今から思うと隔世の感があるが、外務省大蔵省に呼ばれて、ちょっと公職をしていたので許可になり実現した。アメリカでの任務を終えてからヨーロッパへ足を伸ばすことが出来た。

さわめきの中、ふと目をさます。
ここはカナダのホテル。花火、クラッカー、クリクションとかさなり、
世界各民族の種類が集まつてのお祭
さわぎ。クリスマスの美しいツリー
がまだかなりつけのまま一九九三年
の夜明けである。

ライトで美しく染められたミルク
色のナイヤガラの滝は、冬も氷なら
い大自然の姿で悠然とかまえている
ようだ。

スケッチを試みたが寒さと風で飛
ばされそう。絵では「泉の湧くまで
自分の足元を掘る」というが、感動
の心のまま描くにはむづかしい対象
である。

旅行先では急ぎ足なので、その訓練に未だ二ヶ月あるので野幌の原始林に出掛けました。

出逢い



高倉とき子

A black and white portrait of Setsuko Kawanabe, a woman with dark hair pulled back, wearing a striped sweater.

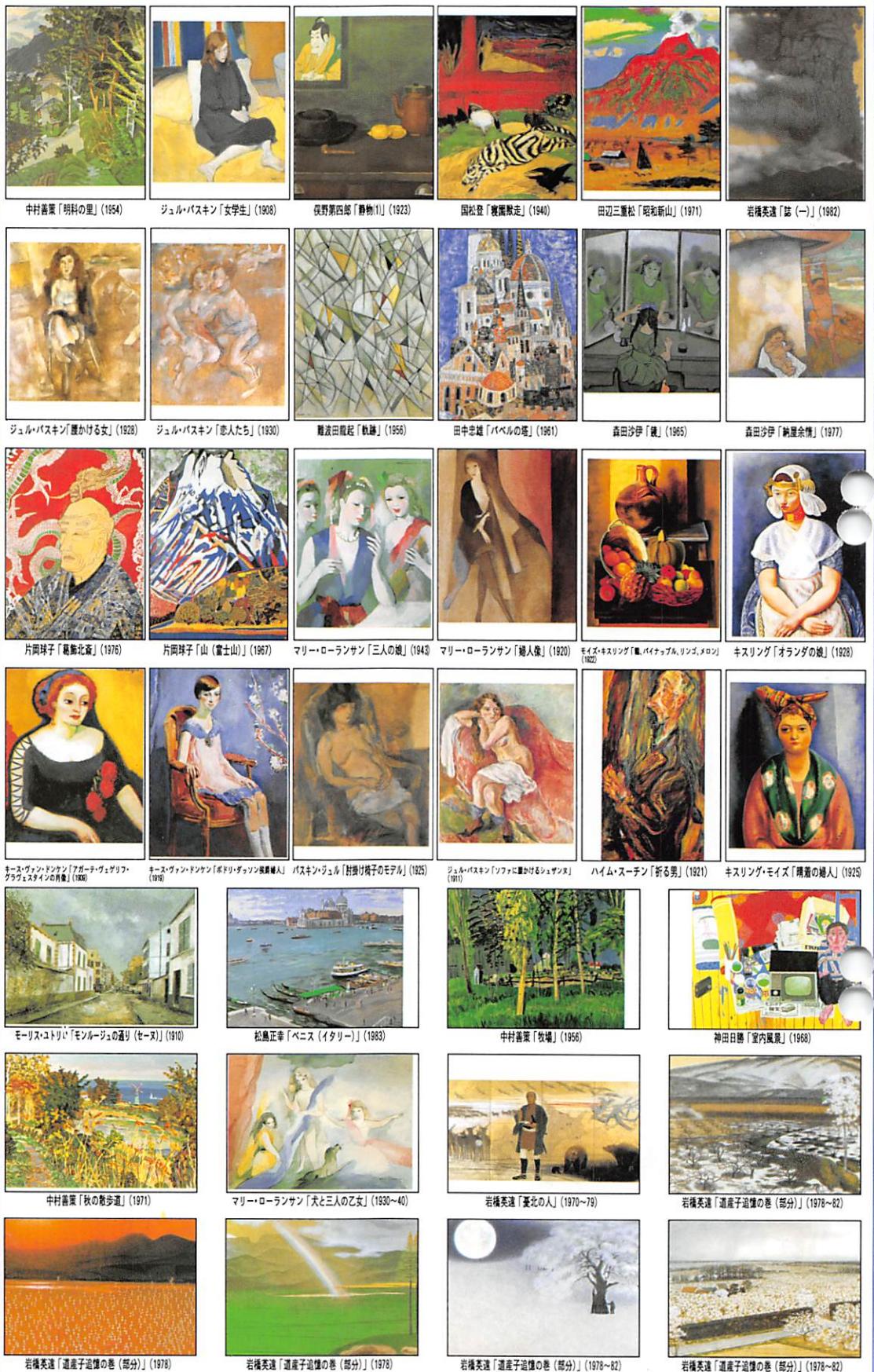
四



山田 武雄

予定は未定で決定ではない、度々
変更する事もある。

絵はがきコーナー I



ご希望のむきは近代美術館1階売店でお求めください。